

現代沖縄における土帝君の整理 (2)

大城 沙織

Sorting the “Tu-Ti-Kun” in Contemporary Okinawa (2)

Saori OSHIRO

沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要 第18号別刷

2025年3月14日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.18
March, 2025

現代沖縄における土帝君の整理（2）

大城 沙織¹⁾

Sorting the “Tu-Ti-Kun” in Contemporary Okinawa (2)

Saori OSHIRO¹⁾

1-1 はじめに

本稿は沖縄における土帝君信仰について取り上げ、その信仰の様相を整理することを目的とする。土帝君とは、中国にルーツをもつ土地神・農耕神のことを指す（写真1）。



（写真1）伊是名村勢理客の土帝君
（2023年3月筆者撮影）

土帝君は16世紀に久米土族の鄭弘良によって琉球に招来され、現在的那覇市大嶺に祀られたことに端を発している。土帝君のルーツとされるのは、「土地公」「土地爺」「福德正神」と呼ばれる土地神である。筆者は中国・台湾の土地神を沖縄社会がどのように受容し信仰し続けてきたのかに関心を持ってきた。現代沖縄において執り行われている土帝君の祭祀に参加すると、その信仰が中国・台湾の土地公とは異なっていることがわかる。それは土帝君が沖縄社会の変化に合わせて変容してきた結果であると考えられる。

また、土帝君は筆者が把握しているだけでも60箇所を超える地域で信仰されている。土帝君信仰は地域ごとに大きな違いがみられるため、信仰の総体

を掴むのが容易ではない。そのため、本稿では沖縄各地で現在信仰されている土帝君について整理し、土帝君信仰研究、ひいては沖縄における民間信仰研究の基礎となることを目的としたい。なお、現代沖縄の土帝君信仰についての整理は、『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要第17号』掲載の拙論でも行った（大城 2024a）。拙論では土帝君信仰の分布、名称、性格、神体の形態の4項目について整理を行った。しかし、神の性格など実際の祭祀の場とともに考えなければならないことも多い。よって、本稿では祭日、祭祀組織、招来者・招来時期、招来伝承の4項目について整理し、分析を行う。

1-2 先行研究と方法

沖縄における中国由来の信仰については窪徳忠が研究を行っている（窪 1970ほか）。窪は『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』において、沖縄県内の土帝君を50ヶ所近く報告しているほか、多くの書籍で言及している（窪 1990）。窪は沖縄における外来信仰、特に中国と関わりの深い信仰に注目し、道教との関係のなかから沖縄の民間信仰を捉える研究成果を遺した。

筆者は拙著において土帝君の招来時期を琉球王国時代と琉球処分後に分けて整理し、招来の契機を①役人層による招来、②屋取集落開墾にあわせた招来、③民間宗教者による招来の3つに分けて分析を行った（大城 2024b）。現在沖縄各地で祀られている土帝君の招来時期は地域によって異なり、招来の契機もまた、時代が下るにしたがって役人層から民間人（民間宗教者）へと変化してきたと考える。

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

そのほか、地域で執り行われる村落祭祀の全体のなかで土帝君信仰を捉えることを目的として、南城市佐敷津波古で調査を行ってきた（大城 2023）。

土帝君は現在筆者が把握しているだけでも、60件以上存在する。これは前述した窪の先行研究において報告されている数字に加え、市町村史や筆者によるフィールドワークにて把握している数である。その多くが村落にて祀られている数であり、個人単位で祀られている土帝君を含めると、実際の数字はさらに多いと考える。本稿では現在把握している63件について整理し、後の調査・研究の基礎研究としたい。なお前述の通り、招来時期・招来者については拙著（大城 2024b）において言及しているが、本稿では新たに他項目と併せて考察を加えた。

2-1 祭日

土帝君の祭日は地域ごとに異なっている。年に一度土帝君を拝む地域もあれば、村で行われる年中行事の全てで拝む地域もある。また、月ごとの祭祀実施回数にもばらつきがある。

ここでは紙面の都合上、土帝君の祭日をすべて取り上げることはせず、各地で土帝君を拝む祭日が集中している2月のみを取り上げる。2月の祭日は中国・台湾との類似点が指摘できる一方で、他の年中行事と習合・混合されるかたちで村落祭祀に組み込まれている様子もみえる。そのような理由から2月の祭祀は、他の月と比較しても特徴的であると考え

る。なお本節では特に断りがない限り、祭日は全て旧暦で表記する。

2月に土帝君を拝む祭祀名を挙げると、①土帝君の名前を冠する祭祀、②腰憩い（クスッキー・クシユックワーシー）系、③カンカー・シマクサラシ系に分けることができる。

①土帝君の名前を冠する祭祀名としては、土帝君祭り（本部町瀬底）、土帝君拝み（南城市小谷）、土帝君ウマチー（南城市佐敷）、土帝君ヌ御願（南城市屋比久）などがある。また、フトキ祭り（伊平屋島全般）、佛祝い（うるま市宮里）、村社祭（国頭村奥間）とする例もあるが、佛や村社といった名称は土帝君の別名称である（大城 2024a）。土帝君の名前を冠する祭祀は、基本的に2月2日に執り行われ

ている。その理由として、中国・台湾の土地公との関連性が指摘される（注1）。

②「腰憩い」とは農作業の節目として行われる農耕儀礼の一種で、豊作の感謝と祈りをささげるとともに、住民の慰労の意味もあった。腰憩いでは土帝君のほかに井戸（カー）など農業にゆかりのある拝所を拝み、広場などで宴会を催した。ここからは土帝君が沖縄において農業神として捉えられていることがわかる。

③カンカー・シマクサラシ（注2）とは、疫病や悪霊がムラや家内に入らないように行われる儀礼である。実施月は地域によって異なるものの、多くは季節の変わり目に行い、2月と8月に多いとされる（宮平 2019）。また、宮平はシマクサラシ儀礼の期日に変化したという事例に注目し、期日の変化のパターンの一つとして、シマクサラシ儀礼以降に実施される他の年中行事と同日に行われるようになった例を挙げている。その中には土帝君儀礼のほか、②に挙げた腰憩いや、アブシバレー（注3）、サングウチアシビ（注4）、芋の祭りなど含まれている。これらの行事がシマクサラシ儀礼と同日に行われるようになった理由として、共食する点、動物を使う点、災厄を祓うことを目的としている点といった共通点があり、「共通点のある行事であれば、一回にまとめた方が良いという観点から統合されたと把握される」と分析している（宮平 2019 p.182）。

①に挙げた土帝君の祭祀名を冠する拝み以外は、集落の他の拝所や聖地、様々な年中行事との関係性のなかで習合や混合しながら拝まれていることが指摘できる。また、宮平の分析からは、こうした傾向は土帝君に限ったものではなく、様々な祭祀においてみられるものであることがわかる。

2月以外の月の祭日もまた、村落祭祀の一環として土帝君が他の拝所とともに巡拝されることが少なくない。土帝君の祭日を把握するためには、土帝君を取り巻く村落の状況をも視野に入れて分析することが重要である。

2-2 祭祀組織

土帝君祭祀が誰によって担われているのか、その中心人物を表にまとめた（表1）。土帝君祭祀は①自治体関係者、②自治会関係者、③地域有志、④職

能集団、⑤親族集団の5パターンに分けられる。実際の祭祀運営においては、①から⑤までが混在していたり、一人の人物が複数の組織に属していたりすることが少なくないことには留意したい。本稿ではフィールドワークのほか、市町村史の記述を参考に祭祀組織を整理した。

現在の村落祭祀において中心人物となるのは、②自治会職員が最も多い。これは村落における神役不在の状況を反映した結果でもある。糸満市武富のように、村落祭祀として自治会が中心となりながらも、自治会長の呼びかけによって神役を担っていた家が参加し、祭祀を運営する事例もある（注5）。そのため、自治会の関与には地域によってグラデーションがみられる。

なお、自治会は字を単位とした団体であり、その下部組織として班や組が設けられることもある。読谷村長田は西組と東組の2組に分けられる。そのうち西組に土帝君があり、西組の住民によって祀られていた。しかし太平洋戦争中、軍人を送り出す際には自治会主催で字民総出となって土帝君を拝んでいる（読谷村史編集委員会編 1995）。北谷町上勢頭の土帝君も田中組という単位で祀られており、土帝君は特に青年たちの頭「ニーセーガシラ」によって拝まれた（北谷町史編集委員会編 1992）。

そのほか特徴的な祭祀組織としては、伊是名島諸見・勢理客両地域で「フトウキアタイ」と呼ばれる役職が祭祀の中心を担っている例がある。「フトウキ」とは仏であり、この地域では土帝君のことを「フトウキ」と呼ぶことからきている。「アタイ」とは役職名のひとつで、村落においては山アタイなど様々なアタイが置かれた。フトウキアタイは2月2日の例祭のみならず、祠の管理、祠周辺の清掃、毎月1日と15日の拝みといった職務が求められる。フトウキアタイは区長により選出され、勢理客区ではフトウキアタイに対して給与も支払われる（伊是名村史編集委員会編 1989）。このことから、フトウキアタイによる祭祀は自治会組織による祭祀の延長とも考えられるだろう。

また、自治会と類似の組織として郷友会がある。郷友会とは故郷を同じくする者同士が結成する組織のことを指す。本稿において取り上げる郷友会は、集落が米軍によって接収されたため、他地域に移住

せざるを得なかった者同士で結成したものを指している。宜野湾市宜野湾は集落の大部分が普天間基地となっており、郷友会が結成されている。土帝君祭祀も郷友会によって担われており、自治会長は郷友会から「集落代表」というかたちで招待を受けて拝みに参加していた（注6）。

自治体が祭祀の中心を担う例もある。国頭村奥間の土帝君祭祀は国頭村役場が中心的に担っている。国頭村長も参加するその祭祀は盛大なものであり、国頭村の各自治会長も参加している。ここからは国頭村奥間の土帝君が奥間という字・集落レベルの神ではなく、国頭村全域に信仰圏をもった信仰であることがわかる。国頭村の場合、神役組織の衰退とは関係なく、従来から自治体が主体となって祭祀運営していることも特筆できる点である（注7）。同じく読谷村喜名の土帝君も、喜名観音堂の僧侶の死去後は村長によって担われている（注8）。

地域の有志会が土帝君祭祀を担う例もある。うるま市喜仲の土帝君は有志会が祭祀の中心を担っている。これは喜仲地区が1956年に喜屋武地区と仲嶺地区の合併によって成立した地域であることが背景にある。喜仲の土帝君は、喜屋武地区と仲嶺地区とで祭祀方法が異なっていることも、自治会を単位とせず、有志会で拝みを続けている要因となっているだろう。

職能集団によって祭祀が担われる例もある。那覇カラヤーや那覇市山川（首里カラヤー）では、瓦職人によって祭祀が担われた（那覇市企画部市史編集室編 1979）。那覇カラヤーの土帝君は元来、陶工を生業としていた嘉数門中で祀っていたものの、異姓の同業者や他の寄留民（注9）も参加を求めるようになり、カラヤー一帯の土地神としての性格を帯びるようになった（那覇市企画部市史編集室編 1979）。この土帝君には火伏せの利益もあるとされ、土帝君に求められる機能が祭祀集団によって変化していることが読み取れる。また首里山川の土帝君は職人の頭が司祭者となっている。特定の職業と結びつく土帝君は瓦職人のみであるが、それは瓦職人が土に深く結びつく生業であることと関係しているのではないか。

門中単位で祀られる土帝君もある。今帰仁村越地、本部町浜元、うるま市平良川、北谷町山川家がその

例である。今帰仁村越地は屋取集落（注10）であり、土帝君を祀る宮里家は久米三十六姓である（今帰仁村史編纂委員会編 1975）。うるま市平良川の土帝君も同様に先祖が士族層で、中国から神像を持ち帰ったとされる（うるま市具志川市史編さん委員会編 2011）。また、北谷町の山川家もまた先祖が北谷間切の地頭代であった。

個人で祀られている土帝君は、その性質上、市町村史などに記述されることが少なく、把握が難しい。現在把握できている例では、那覇市久米が挙げられる（那覇市企画部市史編集室編 1979）。那覇市久米は久米三十六姓の居住地であり、媽祖や孔子といった中国的信仰が行われてきた。土帝君の沖縄における伝播を考えるうえでも、久米三十六姓の存在は重要である。

なお、祭祀組織が変更される例もある。前述の通り、那覇カラヤーでは元来嘉数門中で祀っていた土帝君が同業者、地域住民へと広がっていった。また本部町瀬底の土帝君は、元来上間家が祀っていたが、大正時代に自治会が関わるようになった（瀬底誌編集委員会編 1995）。

土帝君の祭祀組織からは、土帝君が地域の神として認識されている例が多いことが指摘できる。ただ、ここでいう「地域」の規模は様々であり、自治体全域を含む場合もあれば、集落のなかの一部のみを指す場合もある。注目すべきなのは、祭祀組織が一定の家から集落へと変更される事例である。土帝君は一般的に土地神、農耕神とされており、その利益は特定の家に限定されるものではないと認識されていたから祭祀組織の変更が起こったのではないか。また、郷友会を祭祀組織とする土帝君からは、沖縄を取り巻く社会問題の影響を読み取ることができる。

2-3 招来時期・招来者

土帝君の招来者及び将来時期については拙稿（大城 2024b）にて論じた。しかし、土帝君の整理を行う上で外せない項目であると考えため、本稿においては簡潔に言及するに留め、招来時期及び招来者を表にまとめた（表2）。

現在、沖縄で信仰されている土帝君のうち、招来者や将来時期が確認されている土帝君は12件であり、全体の1.8割程度にとどまっている。そのため、

土帝君信仰の全体像を明確にすることは難しいが、琉球における中国文化の伝播や民間信仰の広がりを理解するうえで、貴重な伝承であると言える。

土帝君の招来時期をⅠ期琉球王国時代、Ⅱ期を琉球処分後から沖縄戦まで、Ⅲ期を沖縄戦終結後から現在までと区分すると招来者に一定の傾向がみられる。

史料に残る最も古い土帝君の記録は、『球陽』第9巻で1698年に大嶺親方の鄭弘良が中国から神像を持ち帰って、自身が管轄する大嶺村（現在の那覇市大嶺）に祀ったのが始まりとされる（球陽研究会編 1974）（注11）。この鄭弘良による土帝君招来後も、中国との往来に合わせて土帝君が各地に伝えられていく。その例として本部町瀬底の土帝君は、本部間切の地頭代を務めた健堅親雲上が1711年の中国渡航の際に持ち帰って祀ったとされる（島袋編 1919）。

また、首里から勧請された土帝君も存在する。西原町棚原では230年程前に首里の西むいからフトウキを持ち帰ったのが信仰のはじまりとされる（西原町史編纂委員会編 1989）。年代不詳ではあるものの、北谷町上勢頭の喜友名家では先祖が首里から土帝君の絵像を下賜されたとの伝承がある（北谷町史編集委員会編 1992）。

琉球王府との関わりという面では、間切番所（注12）に祀られた土帝君の存在も無視できない。間切番所がおかれた村を「主村」と表現するが、主村に土帝君が祀られる例が少なくない。前述した自治体が土帝君祭祀を行っている国頭村奥間では、1732年から1914年まで間切番所がおかれていた（仲原 2007）。現西原町翁長にあった西原間切の番所にも土帝君が祀られていた様子が『上杉県令日誌』にて記述されている（琉球政府編 1965）。さらに『読谷村史』では「旧藩時代に勧業の守護神として各間切に勧誘したといわれる」と記されているため、地方役人が土帝君祭祀に深く関わっていたことが推測される（読谷村役所編 1969 p.188）。

このようにⅠ期では士族層や百姓であっても地頭代といった比較的地位の高い人物によって土帝君が招来されていることがわかる。琉球王国時代に招来された土帝君は中国ないしは首里から招来されているとまとめることができる。

Ⅱ期は琉球処分からは沖縄戦までの期間である。19世紀には屋取集落の形成に伴って土帝君が招来されるようになる。嘉手納町千原では1897年に集落共有のサターヤー（注13）ができたことを契機として土帝君を祀っている（嘉手納町史編纂委員会編 1990）。また嘉手納町久得は1893年に開墾募集された地域であり、入植者によって豊作と健康、安全の守護神として土帝君が勧請された（嘉手納町史編纂委員会編 1990）。同じく屋取集落である嘉手納町水釜では、「ユシハマタンメー」という易者によって招来されている。

またこの時期には屋取集落にて土帝君を招来している事例がある（北谷町史編集委員会編 1992）。

Ⅱ期の土帝君は役人層の関与をみることができない。また中国から神像が招来されることはなく、様々な地域から招来されている。ただし、屋取集落を形成した人々は元土族であり、中国的教養を得やすい立場であったこと、土族としての誇りや意識を持っていたことも考慮に入れる必要がある。

Ⅲ期は沖縄戦終結から現在までと区切った。この時期には民間宗教者の関与が強くみられる。北谷町上勢頭では沖縄戦を経て神体を紛失、土帝君祭祀も途絶えていたところ、1960年代にうるま市屋慶名出身の男性のユタに指示されるかたちで土帝君を再び祀っている（北谷町史編集委員会編 1992）。また、那覇市宇栄原の土帝君は神人の指示によって祀ようになった（那覇市企画部市史編集室編 1979）。

3 考察

本稿では沖縄において信仰されている土帝君について、祭日、祭祀組織および招来者・招来伝承を簡潔ながらまとめた。民俗学研究においては地域ごとの実践をつぶさに観察し、地域住民からの聞き取りが非常に重要となる。市町村史や先行研究の引用に頼った調査手法には一定の限界も存在する。しかしながら、こうした諸項目の悉皆的調査によって信仰の様相の傾向を指摘することは可能である。筆者は拙著（大城 2024a）において、土帝君信仰について分布、性格、名称、神体の形態の4項目を整理した。拙著の成果も踏まえて、考察を述べたい。

沖縄において60箇所以上で土帝君が祀られ、一見すると性格や祭日、祭祀組織をはじめとする信仰

の様相が多様にみえる。しかし、招来伝承を中心に据え、神体の形態や祭祀組織などその他の諸要素に注目することで、一定の整理が可能であると考えられる。

3-1 役人層との関わり

土帝君は17世紀に大嶺親方の鄭弘良が中国から持ち帰ったことに端を発する信仰である。そのため、役人層との関わりが強いことが指摘できる（注14）。

3-1-1 間切番所との関係性で祀られる土帝君

間切番所との関係性が指摘できる土帝君は、国頭村奥間のほか、読谷村喜名、南城市佐敷など沖縄島各地に点在している。

読谷村喜名や南城市佐敷には現在神像が残されておらず、香炉や石を拝んでいる。しかし間切番所には土帝君神像を安置したとの伝承があることから、現在神像がない地域でもかつては神像を拝んでいたことが推測される。

間切番所との関係性で祀られている土帝君は、祭祀組織が自治会もしくは自治体である。区長や村長が地域の代表者として祭祀を取り仕切ることも特徴である。各間切で土帝君が祀られていた理由は明らかではないが、土帝君が農耕の神としての性格をもつことと無関係ではないだろう。このタイプの土帝君信仰については、安定性の高い農耕に力を入れていた琉球王府の思惑も併せて考察する必要がある。

なお、国頭村奥間の土帝君は「村社」との別名をもっており、信仰圏も集落単位ではなく、国頭村全域である。このことから、基本的に集落を単位とする御嶽などの聖地とは異なる性質をもつと考える。

3-1-2 親族集団との関係性で祀られる土帝君

父系親族集団である門中で祀られる土帝君は、その門中の祖先が中国との往来のなかで土帝君を招来したとの伝承が残る。そのため、基本的に琉球王国時代の招来に限定される。

その理由は不明であるが門中で祀られる土帝君は、沖縄島北部に比較的集中しており、神体が神像である特徴をもつ。なお、神像は中国・台湾の土地神である土地公と類似している。この場合、「ミヤ」

などの別名をもつことはない。

また祭祀は門中の代表や神役によって担われる。ウマチーなどの門中の祭祀に合わせて祀られる場合と2月2日など土帝君の祭日が定められて祀られる場合がある。

3-2 屋取集落との関係性で祀られる土帝君

屋取集落の形成と共に招来され、祀られる土帝君は、沖縄島中部地区の西海岸に多く、屋取集落が沖縄島中部に集中していることとも無関係ではない。また屋取集落の土帝君は石を神体とすることが多く、神像を祀る例は管見の限り存在しない。

屋取集落には御嶽や殿のような拝所が存在せず、古村で行われている5月ウマチーや6月ウマチーなどが執り行われることもほとんどない。屋取集落では他の拝所と共に巡拝されることはまれで、祭日には土帝君のみが拝まれることが多い。屋取集落にて祀られる土帝君は、地人が多く住む古村とは異なる祭祀形態をみることができる。また、土帝君が中国に由来をもち、外来性を帯びているからこそ「勧請可能な神」であったことがわかる。

3-3 民間宗教者との関係性で祀られる土帝君

民間宗教者の助言によって土帝君が祀られる状況は、琉球処分後から現代までみられる。また沖縄戦を経て、土帝君祭祀が断絶していた地域において、民間宗教者の助言によって祭祀が復活する例もみられる。

民間宗教者との関係が深い土帝君には、神像が絵像の土帝君も含まれる（窪 1990）。このパターンの土帝君の神体はさまざまであり、祭日もまたさまざまである。

民間宗教者が信仰を伝えることで、民間宗教者自身の見解に少なからず影響を受けることが推測される。土帝君信仰と中国・台湾の土地公信仰との差異には、こうした人物の影響が大きいことが推測される。

3-2 おわりに

沖縄の民俗はシマと呼ばれる集落ごとに大きな差異がみられる。土帝君信仰も地域ごとに神体や祭日が異なっており、多様性をみることができる。その

ため、土帝君の全体像を把握するのは容易ではない。

そのような困難さを踏まえつつ、本稿では土帝君信仰について祭日、祭祀組織、招来者・招来伝承の項目でまとめた。本稿で整理した諸要素を基礎データとすることで、土帝君の招来時期や祭祀組織ごとに分布や神体の傾向がみられることが明らかになった。土帝君信仰は、琉球王国時代における中国との関係性、琉球王国時代末期から増える屋取集落、民間宗教者の関与など、琉球・沖縄が辿ってきた社会変化に影響を受けながら成立していることが指摘できる。

本稿の成果を基礎データとし、今後は具体的な祭祀実践の参与観察や聞き取り調査を継続し、土帝君のみならず集落の他の聖地との関わりを踏まえた祭祀研究を行いたい。

注釈

(注1) この日は土帝君のルーツとなる中国・台湾の土地公の祭日でもあり、盛大な祭祀が執り行われる。2月2日を祭日とする点は、中国・台湾の土地公と沖縄の土帝君における共通点の最たる例である。しかし、中国・台湾ではこの日を土地公の生誕日とするのに対して、沖縄では一部地域を除いてそのような観念を見ることはできない。寧ろ、那覇カラヤーの土帝君は2月2日を土帝君の年忌として、先祖の年季供養に準じた祭祀を行っている（那覇市企画部市史編集室編 1979）。ここでは生誕とは真反対の死去との繋がりが感じられる。

(注2) カンカー・シマクサラシ共に防疫儀礼を指す。儀礼の名称については（宮平 2019）に詳しい。

(注3) アブシバレーとは沖縄島周辺で行われる害虫防除の儀礼。一般的に農耕儀礼の一種とされる。旧暦4月に行うことが多い。

(注4) サングウチアシビとは、女性の節句、女の子の成長を祝う行事のこと。浜下りともいった。

(注5) 2024年フィールドワークより。

(注6) 2022年フィールドワークより。

(注7) 国頭村奥間は琉球王国時代、間切番所が置かれた地域であり、地頭代が祭祀を行っていた（仲原 2007）。地頭代とは地頭に代わって村落

- 行政を担った者で、間切番所の最高位とされた。
- (注8) 読谷村喜名の土帝君は、喜名観音堂と隣接しており、元来僧侶の関与があったという。しかし現在では読谷村と喜名集落で祭祀を行っている(2021年フィールドワークより)。
- (注9) 寄留民とは地域に移り住んでいる者のことを指す。先祖代々土地に住み、地割制の対象とされた元々の百姓、地人(ジーンチュ)とは区別された。
- (注10) 屋取集落とは18世紀初頭以降、士族の帰農によって形成された集落のことを指す。
- (注11) ただし程順則の『指南広義』の「柔遠駅土地祠記」(1691年)に土地公についての記述があるため、鄭弘良が大嶺に土帝君を祀る以前から、琉球では久米村を中心に中国の土地神信仰についての知識が共有されていたことがわかる。
- (注12) 間切とは琉球における地方行政区分のことを指し、現在の市町村に重なる点がある。間切には中心となる地域に間切番所が置かれ、年貢収納などの仕事を担った。
- (注13) サーターヤーとは製糖小屋を指し、圧搾機を用いて製糖を行った。サトウキビは近世以降、商品作物として村落において重要な作物となった。
- (注14) ここでいう「役人層」とは、士族身分に限定されるものではなく、百姓身分の地頭代なども含む。

主要参考文献

- 伊是名村史編集委員会編 1989 『伊是名村史 下巻(島の民俗と生活)』伊是名村
- うるま市具志川市史編さん委員会編 2011 『具志川市史 第八巻 民俗編』うるま市教育委員会
- 大城沙織 2023 「土帝君信仰の整理と村落祭祀 南城市津波古を中心事例として」公益信託松尾金藏記念奨学基金編『明日へ翔ぶ—人文社会の新視点—6』風間書房
- 2024a 「現代沖縄における土帝君の整理(1)」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要 第17号』沖縄県立博物館・美術館
- 2024b 「海を越えた土地神—沖縄における土帝君の招来について」『チーシンブー 第12号』一般社団法人 久米崇聖会
- 嘉手納町史編纂委員会編 1990 『嘉手納町史 資料篇 2 民俗資料』嘉手納町役場
- 球陽研究会編 1974 『球陽』角川書店
- 窪徳忠 1970 「沖縄地方の土帝君信仰」窪徳忠編『沖縄の社会と習俗』東京大学出版
- 1990 『目でみる沖縄の民俗とそのルーツ』沖縄出版
- 島袋源一郎編 1919 『国頭郡志』沖縄県国頭郡教育部会
- 瀬底誌編集委員会編 1995 『瀬底誌』本部町瀬底
- 北谷町史編集委員会編 1992 『北谷町史第3巻 民俗篇2 民俗 上』北谷町役場
- 仲原弘哲 2007 「国頭・中頭・島尻方の間切番所と同(主)村」今帰仁村歴史文化センター編『なきじん研究 2007 vol.15』沖縄県今帰仁村教育委員会今帰仁村歴史文化センター
- 今帰仁村史編纂委員会編 1975 『今帰仁村史』今帰仁村役場
- 那覇市企画部市史編集室編 1979 『那覇市史資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室
- 西原町史編纂委員会編 1989 『西原町史 第四巻資料編3 西原の民俗』西原町役場
- 宮平盛晃 2019 『琉球諸島の動物儀礼 シマクサラシ儀礼の民俗学的研究』勉誠出版
- 読谷村役所編 1969 『読谷村誌』読谷村役所
- 読谷村史編集委員会編 1995 『読谷村史 第4巻資料編3 読谷の民俗(上)』読谷村役場
- 琉球政府編 1965 『沖縄県史 第11巻 資料篇1 上杉県令関係日誌』琉球政府

表 1 土帝君の祭祀組織

場 所	祭 祀 組 織	参 考
国頭村奥間	自治体	現地調査
今帰仁村越地	親族集団	①
本部町瀬底	親族集団→自治会	②
本部町浜元	親族集団	現地調査
恩納村喜瀬武原	不明	
うるま市屋慶名	不明	
うるま市喜屋武（注 1）	有志会	③
うるま市宮里	自治会	③
うるま市桃原（宮城島）	自治会	現地調査
うるま市平良川	親族集団	③
読谷村喜名	自治体・自治会	現地調査
読谷村親志	自治会	現地調査
読谷村長田	組	④
嘉手納町水釜	自治会	⑤
嘉手納町千原	不明	
嘉手納町久得	字民	⑤
北谷町桑江	現在は祀っていない	⑥
北谷町砂辺	字民	⑥
北谷町玉代勢	字民	⑦
北谷町北谷（山川家）	親族集団	⑥
北谷町上勢頭	組	⑥
北谷町伊礼（注 2）	字民	⑧
北中城村熱田	自治会	現地調査
西原町棚原	不明	
西原町翁長	現在は祀っていない	
西原町我謝	不明	
宜野湾市大謝名	自治会	現地調査
宜野湾市宜野湾	郷友会	現地調査
浦添市牧港	現在は祀っていない	⑨
那覇市久米	個人	⑩
那覇市安里	不明	
那覇市長田（那覇カラヤー）	親族集団→地域	⑩
那覇市宇栄原	自治会	⑪
那覇市大嶺（注 3）	不明	
那覇市国場	自治会	現地調査
那覇市首里平良	不明	
那覇市壺屋	陶工ら	⑩
那覇市安次嶺	不明	
那覇市垣花（注 4）	不明	
那覇市真嘉比	不明	
那覇市牧志	不明	
那覇市石嶺	不明	
那覇市首里山川（首里カラヤー）	不明	
那覇市松川	自治会または向上会	⑫
那覇市寄宮（注 5）	不明	
那覇市安謝	不明	
那覇市泊	現在祭祀はない	現地調査
那覇市若狭	不明	
豊見城市与根	自治会	⑬
豊見城市我那覇（注 6）	自治会	⑫
南城市佐敷	自治会	現地調査
南城市津波古	自治会	現地調査
南城市小谷	自治会	現地調査
南城市新里	自治会	現地調査
南城市手登根	自治会	現地調査
南城市屋比久	自治会	現地調査
糸満市武富	自治会	現地調査
伊是名村諸見	フトッキアタイを中心に自治会	⑭
伊是名村勢理客	フトッキアタイを中心に自治会	⑭
伊平屋村我喜屋	不明	
伊平屋村田名	不明	
久米島上江洲	不明	
久米島大原	不明	

（注 1）現在の所在地は喜仲 （注 2）現在の所在地は伊平 （注 3）現在の所在地は宇栄原 （注 4）現在の所在地は山下町 （注 5）那覇カラヤーと同一のものか。現在の所在地は長田。 （注 6）現在の所在地は田所

表 1 参考文献

- ①今帰仁町史編纂委員会編 1975『今帰仁村史』今帰仁町役場
- ②瀬底誌編集委員会編 1995『瀬底誌』本部町瀬底
- ③うるま市具志川市史編纂委員会編 2011『具志川市史 第八巻 民俗編上』うるま市教育委員会
- ④読谷村史編集委員会編 1995『読谷村史 第 4 巻資料篇 3 読谷の民俗 下』読谷村役場
- ⑤嘉手納町史編纂委員会編 1990『嘉手納町史 資料篇 2 民俗資料』嘉手納町役場
- ⑥北谷町史編集委員会編 1992『北谷町史第 3 巻 資料篇 2 民俗 上』北谷町役場
- ⑦北谷町史編集委員会編 1994『北谷町史第 3 巻 資料篇 2 民俗 下』北谷町役場
- ⑧山内健治 2019『基地と聖地の沖縄史 フェンスの内で祈る人びと』吉川弘文館
- ⑨浦添市史編集委員会編 1983『浦添市史 第 4 巻資料編 3 浦添の民俗』浦添市教育委員会
- ⑩那覇市企画部市史編集室 1979『那覇市史資料篇 第 2 巻中の 7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室
- ⑪波平エリ子監修 2012『小祿の拝所』那覇市小祿南公民館
- ⑫松川字誌編集委員会編 2010『松川字誌』松川向上会
- ⑬豊見城市市史編集委員会民俗編専門部会編 2008『豊見城市史 第二巻 民俗編』豊見城市役所
- ⑭伊是名村史編集委員会編 1989『伊是名村史下巻（島の民俗と生活）』伊是名村

表 2 土帝君の祭祀組織

地域名	年 代	備 考	参考
那覇市大嶺	1698	史料上最古	①
本部町瀬底	1712		②
西原町棚原	1790頃		③
読谷村長田	1879	屋取集落	④
嘉手納町千原	1897	屋取集落	⑤
読谷村親志	1899	屋取集落	⑥
嘉手納町久得	1902	屋取集落	⑦
嘉手納町水釜	1917	屋取集落	⑤
那覇市安次嶺	1919		⑧
那覇市宇栄原	1960		⑧
那覇市壺屋	1979年頃		⑧
北谷町上勢頭	1960年頃	信仰の復興	⑨

表2 参考文献

- ①球陽研究会編 1974『球陽』角川書店
- ②島袋源一郎編 1919『国頭郡志』沖縄県国頭郡教育部会
- ③西原町史編纂委員会編 1989『西原町史 第四巻資料編3 西原の民俗』西原町役場
- ④読谷村史編集委員会編 1995『読谷村史 第4巻 資料篇3 読谷の民俗 上』読谷村役場
- ⑤嘉手納町史編纂委員会編 1990『嘉手納町史 資料篇2 民俗資料』嘉手納町役場
- ⑥読谷村史編集委員会編 1995『読谷村史 第4巻 資料篇3 読谷の民俗 下』読谷村役場
- ⑦久得史編さん委員会編 2019『嘉手納町 久得史』久得郷友会
- ⑧那覇市企画部市史編集室編 1979『那覇市史資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室
- ⑨北谷町史編集委員会編 1992『北谷町史第3巻 民俗篇2 民俗 上』北谷町役場

